

非思量 NO.266

慈 悲 ～親切の種まき～

坐禅会にも参加してくださっている静岡大学で英語の語学指導をされているスティーブ・ユリックさん（米国出身）の一番好きな日本語は「慈悲」だそうです。英語に訳すとすればcompassion（思いやり）と訳せるそうです。

仏教で慈悲と言えば、仏さまの心そのものです。私たち仏道を志す者にとっての目的でもあります。「慈」は抜苦（衆生の苦しみを取り除いてあげること）で、「悲」は与楽（衆生に楽を与えること）をいいます。仏さまは無縁の存在である大宇宙全体に慈悲を与えられます。これを大慈悲といいます。しかし、私たち人間はそうなれません。その原因は慈悲とは反対の愚痴の心があるからです。愚痴とは衆生の因果がわかっていない無知から生まれます。自分より裕福な人を妬んだり、人の失敗を知り安心したりする心です。それが苦しみの原因でもあるのです。そんな存在の私たちができる事はなんでしょうか。

それは小さな慈悲（小慈悲）の種まきです。

2000年に公開された「ペイ・フォワード可能な王国」というアメリカ映画があります。11才の少年が、学校で出された課題「世界を変える方法を考え、それを実行してみよう」に取り組んだ方法がまさしく小慈悲の種まきでした。決して幸せとは言えない家庭環境にある少年は、まず自分の身の回りの人に善いこと（親切）をします。しかし、自分への見返りは求めず、別な3人へ新しい親切をしてあげてほしいと告げます。家庭問題や障害に伴う劣等感、貧困等、様々な苦しみを抱えていた人々が親切にされることで心が癒され、その親切を他の人につなげていきます。そして、しばらくして少年の周りも少しずつ幸せになっていくという物語でした。

私たちは多くの苦しみの中で生きています。コロナ禍の苦しみも私たちが人間だからです。そんな私たちが幸せに生きる方法が小さな慈悲の種まきです。苦しんでいる方の悲しみを自分の悲しみのように共感してあげるだけでもその人は救われます。一回の笑顔のあいさつが周りの人の心を温かくしていきます。なかなか苦しみの根っこは抜けませんが、自分の周りに親切の種を蒔いていけば、世界は少しずつ変わっていくのです。

コロナ禍の世だからこそ、できる人から慈悲の種まきをして、衆生を幸せの花でいっぱいにしていきましょう。